

〔学会企画シンポジウム参考資料2〕

Takun Walis 邱建堂 口述歴史

タクン・ワリス (Takun Walis, 邱建堂)

(魚住悦子訳)

〔凡例〕

- ・本稿は、簡鴻模、依婉・貝林、郭明正合著『清流部落生命史』（永望文化事業、2002年）に収録された、タクン・ワリス Takun Walis（邱建堂）の口述歴史の翻訳である。各口述の最後に口述年月と該書の所収ページを記す。
- ・原文にローマ字で表記されているセデック語は、資料としての整合性を重視して、日本側資料に用いられてきたカタカナ表記で記す。また、ローマ字表記は初出のみとし、以下は省略する。
- ・原文にはもともと注はない。本稿に付した注は、訳者の注である。また、短い訳注は本文中に〔 〕に入れて示した。生没年やセデック名等は『清流部落生命史』を参照した。

○タイモ・モーナ Temu Mona の父親は、モーナ・ペッカオ Mona Peko である。モーナ・ペッカオは当時、タロワン Turuwn 社の頭目であり、タイモ・モーナとモーナ・ルーダオの次男バッサオ・モーナ Baso Mona は深い親交があった。

〔1-1 Mona Peko 家族〕の章。2002年4月口述。『清流部落生命史』1頁)

○以前、仁愛郷に課員として務めていたとき、私は選挙を担当していた。1979年は、アメリカとの国交断絶の年で、選挙は合同で手続きを進めることになった。私はバスで県政府へ行き、麻袋に投票用紙を詰めた。仁愛郷の事務所に戻って、政見発表会を行ったが、そのときに、候補者は誰もがいい人なのだと知った。しかし選挙になると、鬪鶏と同じで、お互いに噛み合うのだ。実際には、誰もいい人だった。勇気をだして立候補する人たちは、みな、いい人だった。しかし、今は違ってしまい、どんな人でも立候補するようになった。私が郷公所民政課につとめた2年目、林春徳が郷長に立候補し、翌1981年に郷長になった。私は郷公所の秘書になったが、秘書の生活には慣れなかった。朝は台北、夜は高雄という具合で大変だった。そのうえ、酒も飲まなければならなかった。仕事のほうは問題がなかったが、このようなつきあいには慣れなかった。秘書は3年の任期だが、私は任期が終わらないうちにやめたくなった。1985年、調査局の政風室が職員を募集したので、私は試験を受けて合格した。半年間の研修を受けるために辞表を書いたが、ワリス郷長は私を行かせたがらなかった。しかし、合格してしまったのだから、どうしようもなかった。研修を終えて、また仁愛郷公所に戻ってからは、政風の仕事をした。郷公所に戻って最初に扱ったのは、庶民から金を集めて肥料を買い、そのなかから横領や公文書の偽造をしていたケースだった。この件が問題になってから、私はその人に会いに行った。彼は出勤しておらず、何度も会おうとしたが、会えなかった。私は上司に報告するしかなく、その後、彼は逮捕された。彼はかえって気が楽になったと、大変喜んでいて。政風室に3年いたが、農会¹に問題が

あると感じ、農会の総幹事に立候補した。1989年、農会の総幹事になり、もう13年になる。私は、今では県内で最古参の農会総幹事である。

(『清流部落生命史』「3-1 Nguhan 家族」113頁。2002年4月口述)²

○私は清流で生まれた。そこは祖父の家で、以前は、私たちはみな一緒に住んでいたが、私が大きくなってから、邱宏水³の家と分かれた。子どものころは、いつも部落で暮らした。私の幼稚園の先生は黄修道女だった。幼稚園は私の家の裏にある、粗末な天主堂で、泥と竹で造られていた。そのころ、黄修道女はまだ若く、二十数歳でしかなかった。八七水災〔1959年8月〕のとき、私は自分の家の裏に立って、私たちの教室が水に流されるのを見ていた。そのころ、教会は、私たちにとっては教室だった。それ以降、教会が再建されることはなかった。そのあたりは河床になってしまい、教会は中原へ移転した。もともと、正式な教会は中原にあった。中原と眉溪の教会はどちらも古いが、眉溪がいちばん古い。後には、みな、歩いて中原の教会へ行くようになった。幼稚園ではだいたい1年ぐらい学んだ。以前、教会は会派に関係なく、誰でも受け入れていた。昔は子どもが多かったし、幼稚園は教会にしかなかったからだ。

(114頁。2002年7月口述)

○以前、互助国民小学校には生徒は二、三百人いた。私が通っていた頃は、一学年に一クラスだった。二クラスの時もあった。私は一、二年生と六年生の時、互助小学校に通い、三、四、五年生のときは埔里の南光国民小学校へ通った。そのころは、そこ〔埔里〕で勉強するのが流行っていて、誰もが「留学」しており、もちろん私もそうなのだ。私の年代の人たちはみな、埔里に勉強に行った。一年生から行く人もいたが、私は三年生になってから行った。一、二年のときはずっと、ここ〔清流〕にいて、毎日、パチンコを持って学校へ行った。昔の小学校は楽しかった。昼には給食があったし、下校するときには、校長先生や先生たちは、明日は忘れずに鎌を持って来なさい、薪も持って来なさい、饅頭マントウを作るから、と言うのだった。朝にはアメリカのミルクを飲んだ。今でも互助小学校には生徒は百人以上いる。これは大したことだ。そのころの先生には、平地の人も外省籍の人もいたし、簡易師範学校出身の人もいた。洪仁徳⁴や高友利⁵たちもここで教えていた。山地の先生も平地の先生もいた。私たちは六年生になっても、ポポモフォができず、埔里で勉強するようになって、やっとできるようになった。ここで勉強した人は、六年生になっても、ポポモフォができない。ピンインができない。みな、原住民の言葉で話していた。それに、眉原⁶の生徒は必ず私たちの言葉を話さなければならなかった。さもないと私たちに殴られたからだ。それで彼らは私たちの言葉が話せたが、私たちは彼らの言葉が話せなかった。大人になってから、損をしたとやっとわかった。こうして、私たちは彼らよりばかになってしまったようだ。その頃、清流では多くの生徒が埔里へ行って勉強していた。私たちは、埔里天主堂の張伝道師の家に住んでいた。のちに村長になった劉金皇も行った。彼は六年生、私は四年生だった。その後、〔清流に〕戻ったが、それは山地奨学金の試験を受けるためだった。山地奨学金には、山地の学校からしか応募できなかった。私は四年生を二回やった。ポポモフォができなかつ

たので、一年、留年したのだ。そのころは、番仔^{フナー}⁷が流行っていた時代で、番仔、番仔と笑われるたびに、私はそいつらとけんかした。私は学校をサボり、だいたい埔里の学校で国旗を掲揚する朝8時に歩いて〔清流に〕帰ってきた。大通りを歩いて戻った。当時はどうしてか、その原因がわからなかった。たぶん、圧力を感じていたか、学校が面白くなかったか、人とけんかをしたからだろう。部落に戻ってくると、また学校に送り返された。部落に戻って来るのが12時ごろで、ちょうど警察局長の主任に出くわして、連れ戻されたと記憶している。

(114頁。2002年7月口述)

○以前、山地奨学金には定員の枠があった。南投高中〔現、国立南投高級中学〕には10人しか行けなかった。草商〔現、国立草屯高級商工職業学校〕は年によって違った。時には、花蓮高工〔現、国立花蓮高級工業職業学校〕に11~13人、14人目以降は、霧社農校〔現、国立仁愛高級農業職業学校〕、それから花蓮農校〔現、国立花蓮高級農業職業学校〕、最後が台東農校〔現、国立台東專科学校〕だった。まず南投高中、草商、仁愛農高、そして花蓮農校だった。私の同期は人数がたいへん多かった。同期の張秋娘と謝貴美は屏東師範〔現、国立屏東教育大学〕に進学した。潘定芳たちは南投高中に行った。私は草商へ進んだ。私は1965年から68年まで草商で学び、1968年から71年までは南投高中で学んだ。71年から76年までが台湾大学で、大学四年で一年留年した。微積分のせいだったが、私はのんびりやろうと思っていた。会計学は簡単だと思っていたが、やはり再履修しなければならなかった。その頃は女の子と付き合うというようなことがなかったの、まだよかった。女の子とつきあっていたら、だめになっていただろう。女の子とはつきあわないほうがいい。面倒なことになってしまう。そのために卒業できなかった学生がたくさんいた。当時、1971年は、梨山⁸は最も金持ちの村だったので、みんなが戻ってアルバイトをした。誰もが梨山へ行った。私は山で林春徳にばったり会った。彼はキャベツを背負っていた。彼は私の後輩だった。そのころは、大学では、経済力が大きな問題だった。経済力がないと、勉学に影響が出た。私には、アルバイトをする時間が全くなかった。勉強はひどく大変だった。一番の学生から最後の学生まで、成績はだいたい同じだった。私は僑生〔海外からもどってきた学生〕にしか勝てなかった。幸い、海外帰りの学生はおおぜいいた。しかし、そのなかにはよくできる学生もいた。台湾大学には、再試験を受ける学生がたくさんいた。私は一年留年しただけだった。どうということはない。予備校に行かずに、高校を卒業してすぐに大学にはいったのだから。予備校に行なくても進学するのは簡単だった。それに、何ととっても、台湾大学は聞こえがいい。一年留年しても、たいしたことはなかった。

(115頁。2002年7月口述)

○1974年、私が大学3年のとき、10月27日⁹の前から、メディアは霧社事件について報じていたが、どれもでたらめだった。一郎と二郎¹⁰は兄弟で、モーナ・ルーダオの息子だと書いてあった。二郎の父親は、私の祖父と従兄弟関係にあったが、母親が高家に嫁いでからは、私たちとはあまり行き来しなくなった。我が家の先祖は庶民的なほうだったが、彼らは貴族的な家族だった。二

郎の母親は最初に日本教育を受けたグループで、私たちとは生活のしかたがちがっていた。そのため、マスコミは彼らに多く取材したし、彼らはよく話せるタイプだった。私の祖父¹¹は、でたらめを言ったりするような人ではなかったが、私だけがあれこれ、人に尋ねていた。私が尋ねたのは、他の人が尋ねようとしないう問題だった。大学生のとき、いつも私が通訳をしていた¹²が、そのときも、私は帰郷して尋ねた。というのは、霧社事件とは何か、わからなかったからだ。私が尋ねるようになると、メディアが私に尋ねるようになり、私は反論した。1974年、台北では、多くの記者が私に尋ねたので、私は真実を明らかにしなければならなかった。態度は良くなかったが、それは政治的な要素から来っていた。国民党の時代には、高光華の父親の花岡二郎が、民族の英雄とされていたが、この点はきちんとしておかねばならなかった。どちらにしても、外省人はこちらの言うことを聞いても理解できなかった。それで私は反論するべく、中央日報に手紙を書いたが、彼らは文献を勝手に変えてはいけなく手紙を送り返してきた。卒業式のときに、私は祖父を大学へ連れて行った。私は刺青がある老人ふたり連れて行ったが、もうひとりとは張国華¹³の祖父だった。学生たちはみな、私と祖父と張国華の祖父を見ていた。二人は通りを渡ろうとしなかったし、デパートでエスカレーターを見ても、乗ろうとしなかった。脚が切断されると思っていたのだ。信号が緑になったら通りを渡ってもいいのだが、二人はいやがり、車が全部通ってしまったら渡ると言うのだった。動物園ではオランウータンを見たが、観光客はみな、二人を見ていた。二人はオランウータンより有名だった。私が大学三年のとき、モーナ・ルーダオの遺体を故郷に連れ帰った。そのとき、民生庁第三科山地科の郭秀岩たちが担当し、南投県政府と仁愛郷公所も来た。その時、棺にはモーナ・ルーダオが収められていたが、私は棺に入って、モーナ・ルーダオのそばに横たわってみた。彼は私よりずっと背が高かった。短い番刀が二ふりあり、まだ銀の腕輪をつけていた。私が行く前に、祖父が私に、モーナ・ルーダオの左手には金属の腕輪があると言っていた。モーナ・ルーダオは私の祖父と隣同士だった。祖母はこう言っていた。「モーナ・ルーダオは悪い人だ、お酒を飲むといつも私のお父さんとけんかをしていた」。原住民は酒を飲むといつもけんかをする。今日、ちょっとけんかをして、次の日は何ともない。その時、祖母は私にこう言った。「モーナの刀に触っちゃいけないよ。触ったらおまえも伝染して、伝染したら人を殺すようになるよ」。私はそれでも触りたいと思っていたが、やはり触らないことにしようと思った。しかし、今でもまだ触る機会はある。郷公所が多分、モーナ・ルーダオを彼の故郷のマヘボに返すだろうから！

(115頁。2002年7月口述)

○1976年、台湾大学を卒業して、兵隊に行った。金門で兵役に就き、金門から大陸を一年七か月にわたって見ていた。台湾で訓練を受けてから金門に行ったのだが、そのころはまだ砲撃が行なわれていた。奇数日に砲撃し、偶数日には砲撃せず、双方が同時に砲撃した。あちら側の砲撃時間はわりと正確で、夏は7時だった。月を見てみると、「ドーン」と音が聞こえた。私は砲声がよくわかった。私は砲兵だったのだ。金門に行ったばかりの頃は、ひどく怖かった。近くに撃ち込まれると、家も揺れたし、洗面器も跳び上がった。こちら側からも撃ちこんだ。あちら側の砲

撃時間はたいへん正確で、もし最初の砲声を聞いて、腕時計の時間がちがっていたら、すぐに7時にあわせた。彼らが人を撃つことはなかった、というのは、金門はきちんと描かれていて、村を砲撃するはずはなかった。しかし目標がそれることもあった。だいたい30分くらい砲撃した。彼らは一二三砲で、われわれは一〇五砲で砲撃した。一五五砲もあった。一五五砲は金門から撃ったが、一〇五砲は古寧頭まで引き出して撃たなければならなかったし、照準もなかった。まず「ドーン」と撃ってみて、中隊長が見て、低すぎると思ったら調整して高くした。計測はせず、目測だった。

(116頁。2002年7月口述)

○退役すると、すぐに郷公所に勤めた。私は大学するとき、山地行政を受験させられていた。私は受けたくなかったのだが、母がどうしても受けるように言うし、自分でも大学を卒業してから何をしたらいいか、わからなかったからだ。同期生は皆、アメリカへ留学した。私は英語の卒業証書を申請していた。私は日本へ留学すると言っていた。私は同期生より日本語ができたからだ。彼らはアメリカへ、私は日本へ留学する。しかしお金がなかったので、故郷に帰って就職した。その時、責任者は劉進高だった。試験の準備は、一、二か月で充分だった。どの科目も勉強したことがあったからだ。農校の学生にたくさん会ったし、女子学生は私にメモをほうってくれた。合格発表のとき、私は〇〇二で、トップで合格だった。9月から仕事が始まった。その時、郷長は林石樹で、彼のいいところは原住民を求めていることだった。私は村幹事になった。1978年、私は互助村で村幹事になった。その頃はバイクに乗っていて、一日中、部落を走り回っていた。私は、隣長会議を開くのが一番好きだった。私は前は酒が飲めなかった。学生時代は、郭明正〔ダックス・パワン〕とビールを一本飲むのがやっとなかった。2年間、兵隊に行ってくると、高粱酒を一本飲んででも大丈夫になった。その後、会議の時には、私だけが独身だったし、両親は私のお金を使わなかったで、全員に米酒を一本ずつ出した。ちょうどその頃は、最初の社区発展〔コミュニティー発展〕の時期で、村長の高清华は私たちをたいへん重んじてくれた。その頃、代表になると横領しようとしたものだが、私たちは絶対にそんなことはしなかった。一銭も自分のものにしようとは思わなかった。私たちは材料を購入し、それから無償で働いて、中原から梅子林まで道路を造った。それでも四十数万元が残った。活動センターの1階は、私たちが建設した。そのころはとても熱心だった。いずれにしても、中原村の新村と旧村はうまくいってはいなかったで、私たちは別々に会議を開いて、中原を中心にすることにしたと言った。まず新村の会議へ行って、道路について話した。「旧村は造ると言っている。できても羨ましがってはいけない」。それから旧村の会議へ行って言った。「新村は造ると言っている。みなさんは羨ましがらないように」。最後には、みんながいっしょになって道路を造った。セメントは私たちが提供した。盗むことはできなかった。砂利が運ばれて来ると、彼らは互いに監督しあい、盗んだ人がいると、ほんとうにその人を告発した。道も溝も自分たちで造った。コンクリートの厚さも自分たちで決めた。材料は私たちが提供したが、完工しても、まだ四十数万元が残ったのだ。それから、仁愛郷の運動会があった。私たちは人は多かったが、団結はしなかった。李金和が競走、謝敏男

が砲丸投げ、黄流明が走り高跳びに出た。私は子どものころからガキ大将だった。車代は私が出し、自分で食べ物を持って出かけた。二年目には、総合優勝した。高秀英はたいへん背が高く、ひとりでトライアスロンに出た。私は村幹事の時に、北梅国中〔北梅国民中学〕へ教えに行っていた。私は三年生を競走に出し、もちろん、この競走で一般女性グループに勝った。私が北梅国中へ行かなくなってからは、こういうことはなくなった。

(116頁。2002年7月口述)

○村幹事を二年やってから、課員になった。村幹事のときは、点呼表も作らなければならなかった。その頃、中原に行くにはトンネルを通らなければならなかったもので、ひとりずつ、名前を呼んでから通らせた。来ない人にはすぐにお金を徴収しに行った。というのは、当時は造林を進めており、肥料は全部私たちが出していたので、たいへん威張っていたのだ。そのころ、ムササビ撃ちにも夢中になっていた。当時は、考え方が今とは違っていた。そのころの学生は、利益のことは頭になく、同胞を救いたいという使命感を持っていた。それで故郷に戻って仕事につくのが、最大の理想だった。自伝を書くときも、だいたいそのように書いたものだった。村幹事を二年、務めた間に、私は何でもやった。部落に帰るとすぐに、学生を集めて授業をした。車庫が教室だった。私たちが小さい頃、教会は私たちにそのようにしてくれていたもので、大学四年のとき、私たちもそうしたのだった。私と郭明正〔前出。当時、埔里高級工業職業学校教師〕で、私が英語を教え、郭明正が数学を教えた。以前は、親たちは喜んで私たちに子どもを預けてくれた。しかし今はちがう。外にはたくさん、補習塾ができた。村幹事のとき、さらに、北梅国中へ数学を教えに行っていた。以前は、物事は単純で、慣れないことは、あれこれやっていた。その頃には、ムササビ撃ちもうまくなっていた。それまでは、手製の猟銃を使ったことがなかった。手製の猟銃は怖くて、危ないと思っていた。林新發¹⁴という私の先生は、手製の猟銃でムササビが撃てた。私は一回やると、病みつきになってしまった。私はそこにいるとき、犬を飼っていた。私は子どものころから犬を飼い始めた。中学生のときには、家へ手紙を書くたびに、僕の犬は元気か、と尋ねたので、母はひどく怒っていた。小さい頃から、祖父は私を連れて、ワナをしかけに行った。父に連れて行ってもらったことはなく、子どもの頃、父の印象はない。いつも祖父が連れて行ってくれた。小学校四年生のときから、父の銃をこっそり持ち出すようになった。その頃は自分で銃弾が作れるようになっていたので、自分で銃を持ち出して改造した。人を撃ってしまいそうになったことも、何回かあった。時々、弟を連れて行行った。帰ってから弟が告げ口をしないように、全員に一回ずつ撃たせた。三番目の弟は撃とうとしなかったもので、引き金を引けばいいんだ、と言ったことを覚えている。バーン！弟も撃ってしまったので、帰ってからしゃべるわけにはいかなかった。六年生の時から猟ができるようになった。父は私に銃を貸してくれた。その時は牛を殺した。たくさんの人が見ていた。銃を撃たなければならなかったが、その時は、銃身が少し長かったので、牛の身体に印をつけ、私にそれにむかって撃たせた。私は命中させた。弾が貫通し、牛は膝を折った。それから彼らは斧で牛を殴って昏倒させた。あとになっても、蔡文明は泣き続けていた。それは彼らの家で飼っていた牛だったのだ。私の家には銃

がどっさりあった。犬もたくさんいた。それは伝統で、祖父の血筋は猟が好きだった。母方はもっとめんどうだった。私の母方の祖父は中原への移住¹⁵を嫌がっていて、拘留されて亡くなった。母方の祖父は中原へは移住しなくなかったのだ。というのは、中原には動物がいなかったからで、彼は奥萬大〔仁愛郷親愛村、霧社の東南方の山地〕の動物を恋しがっていた。当時、祖父は少数の頑迷派で、移住を望まなかった。移住に反対する人は、日本人によって、二、三週間留置された。そして、最後まで残ったのが、祖父と頼美枝の祖父だった。最後にはみな、帰されたが、祖父だけが残された。その後、祖父は毒殺され、彼だけが監獄で死んだ。のちに中原の人たちは日本人を殺そうと計画した。もう一度、霧社事件を起こそうとしたのだ。しかし、この情報が出てしまい、刀を研いでいたときに、三、四人が捕まった。すでに山地警察の時代になっていた。

(117頁。2002年7月口述)

○私と妻の交際は、ビラク Bilaq の紹介で始まった。二人は台中護校〔現、国立台中護理専科学校〕の同期生で、衛生所に勤めていた。そのころ、彼女たちの衛生所が団体で雪見に来た。ビラクは電話をかけてきて、私たちを呼び出した。若い娘に会える、と言うのだ。その頃、私の家族は私を結婚させようとしていて、婚礼のために2頭の大きな豚を飼っていた。1989年の雪見のとき、私は霧社に勤めていた。私と郭明正はバイクで出かけた。しかし、そのとき彼女たちは中正〔仁愛郷中正村〕へ行っていて、二日目にやっと会えた。妻は、台中護校を卒業したばかりで、早く結婚しようとは思っていなかった。私は、これは好都合だと思った。私もあまり早く結婚したくはなかったのだ。のちに私はやはり彼女と結婚した。知り合って一年後だった。結婚を申し込んだとき、彼女の祖父はかつて、日本兵だったので、たいへん恐ろしかった。この祖父が恐ろしいので、彼女の故郷の人は彼女に結婚を申し込む勇気がなかったと聞かされた。

(117頁。2002年7月口述)

○私と蔡茂琳¹⁶、洪仁徳、郭明正、高明輝がいっしょに、霧社事件で最後に人々が避難した岩窟を探しに行ったことがある。蔡茂琳はそのとき、78歳だったが、霧社事件のときは17歳だった。その頃、歩くときには、私は彼を引っぱってやらなければならなかった。幸いなことに、私たちがそのあたりを通るとき、彼はいつも、モーナ・ルーダオの耕作小屋がここにあった、と言って、記憶ははっきりしていた。私たちが探しに行っても、どこにあるのかわからなかったが、彼について行くと、彼はほんとうに探し当てたのだった。私たちはいつもそこを通っていたのだが、なんと、すぐそばにあったのだ。何歩も離れておらず、一面の森林だった。それからちょっと掘ってみると、本当に一列に並んだ石が出てきた。私たちが探し当てると、蔡茂琳は病気になったように、そこで泣いた。洪仁徳もぼんやりしていた。高明輝はひどく怖がっていた。みんな何かに祟られたようになっていた。私だけが番刀で土を掘った。掘ろうとしたのは私だけで、みんなは動かなかった。結局、深すぎて、掘ることができなかった。それから私たちは山頂に行って、山頂で眠った。翌日、川に下りた。その洞穴に彼は行ったことがあると言っていたが、それ

が、その洞穴だった。私たちはそこでは眠らなかった。そこからは川沿いに歩いた。幸い、洪仁徳が縄と斧を持っていた。川の流れはだいたいこれぐらいの高さだった。しかたなく、高明輝を先に下へ降りさせた。彼は降りると、そこにしゃがみこんで、足がかりになった。老人がいたので、そうするしかなかった。私たちは一人ずつ降りて行った。降りていって歩き始めると、とてもきれいな滝が見えた。まもなく午後になる頃だった。郭明正はもう帰ろうと言ったが、帰ることもできなかった。戻ったらもっと遠くなる。ほかには道がなく、そのまま下流に歩いていくしかなかった。パワンはその道を知っていた。下って行って、流れを渡るとき、下着も全部脱いだ。水はとても冷たかったので、脱いでしまうしかなかった。流れをわたると、パワン・ナウイ Pawan Nawi〔蔡茂琳〕は、獲物を見つけた犬のように、喜んだ。下っていくと、絶壁が見えた。彼はそこへ行ってちょっと手を触れると、さらに下っていった。パワン・ナウイは上がってくると、すぐにこう言った。「あったぞ」。私たちはすぐに駆けつけた。目に入ったのは、洞窟ではなくて、岩窟だった。大きな石で削り取られたようになっていて、中には三、四〇人が座ることができた。踊れるぐらいの広場もあって、そこはやや平らになっていた。滝をさらに下ったら、命がなかっただろう。彼らは人の首を手にする、ここで踊った。それに我慢できないような子どもがいたら、放り出された。放り出されたら、生命はなかっただろう。私たちはここで眠った。上を向いて、誰も話をしなかった。私は、石が落ちてくるかもしれないとずっと思っていた。岩窟にはたくさんの模様がかった。彼らはいろいろなことを考えたことだろう。模様には、煮炊きした煤のあともあった。それに石が不規則に並んでいた、人の頭にそっくりだった。その夜、私は稜線に出て、ムササビを撃った。私にはムササビの眼が人間の眼のように見えた。まるで私を監視しているように見えて、ぞっとして、ほっとしてくれと言いたかった。さらに入って行って探してみたが、見つからなかった、出てきた。一匹見つけて、狙いを定めて撃ったが、落ちてこなかった。もう一発撃つと落ちてきたので、銃を投げ出して追いつき、刀をふるってしとめた。それから戻って、彼らにムササビをごちそうした。この岩窟の上、モーナ・ルーダオが死んだ場所だった。戻ってくるとき、シイタケ小屋を見かけた。さらに歩いていくと、ワナもあって、人がいることがわかった。パワン・ナウイはこの道を知っていた。川に出ると、ここに道があると言った。昔、彼はこのあたりをよく知っていたのだ。というのは、さらに上に行ったところにモーナ・ルーダオの耕作小屋があったからである。

(118頁。2002年7月口述)

○1931年、清流に移住してきた。それは密告によるものではなく、しくまれたものだった。5月6日に移住してきたが、10月15日のこと¹⁷は計画的なものだった。霧社事件で1000人以上の人が死んだ。収容所にはまだ500人いたが、その半分が虐殺された¹⁸。これは仕組まれたものだった。日本側の調査班は凄腕だった。家に来て酒を飲み、息子をほめ、酒に酔って、(お宅の息子は)戦わなかったと言う。昔の老人は武を尊んだので、戦ったと認めてしまった。戦いは名誉なことである。こうして秘密が漏れた。女性は騙した。糸を持ってきて騙した。塩魚で騙すこともあった。こうして、(戦いに加わった人の)名前が出てきた。私の家も同じだった。祖父の弟¹⁹は郡

守²⁰を殺したが、みんなそれを知っていた。彼自身も自分が捕まることがわかっていた。高愛徳²¹の母親自身も言っているが、10月15日以前に、警察官がよく家に来た。埔里に行く前日、特別に彼女に仕事を言いつけ、主任の荷物を背負って行くようにと言いつけた。しかし、彼らには思惑があったのだ。埔里に行くと、すぐ、点呼をして、女と子どもを市場に連れて行き、町を見物させた。男たちが派出所に入ると、すぐに扉が閉められた。全部、兵隊で、銃を持っていた。分かれて点呼が始まった。同じ名前のものがいたが、ふたりが「はい」と答えたので、二人とも行かなければならなかった。日本の警察官はすぐに言った。「次、ボアルン社のもの」。私の祖父の弟の名が呼ばれた。彼はすぐに父親²²に、「betaq (ここまで) bda (わたし) hini (ここで) di (終わった)」(セデック語、「もうこれまでだ」と言った²³。彼らには思惑があったのだ。これらの人たちはそれから監禁された。その後、生き埋めにされたということである。しかし実は、生き埋めではなく、先に刺されたのだった。霧社事件で殺された日本人の遺族である女性や子どもたちに刺殺されたのだ。彼らを縛り上げて、こうした人たちが刀で刺した。日本人には報復の習慣があるからである。このことを私は去年、はじめて知った。日本人は仇を討ってこそ、先祖に顔向けができるのだ。これらの人々の遺骨は、のちに、平地人が掘り出して、無縁仏を祀る廟に納めた。埔里簡易裁判所の向かいである。

(119頁。2002年7月口述)

注

- 1 地域の農業発展や農産物の販売促進などのための組織。
- 2 以下はすべて、『清流部落生命史』「3-1 Nguhan 家族」に所収。以下、該書の所収ページと口述年月のみ記載する。
- 3 邱宏水 Pihu Takun (1944-)。邱建堂 Takun Walis の叔父。
- 4 洪仁徳 Sapu Pihu (1931-)。中原部落。
- 5 高友利 Pawan Tado (1931-76)。ホーゴー社の頭目だったタダオ・ノカン Tado Nokan の末子。
- 6 眉原は北港溪上流にある部落で、タイヤル族に属し、セデック族とは言語が異なる。
- 7 ホーロー語 (閩南語)。原住民に対する差別語。
- 8 梨山は台中県和平郷。大港溪の上流にあり、かつてはサラマオと呼ばれた。高原野菜などの農産物と観光で有名。
- 9 原文は「12月27日」となっているが、誤植と思われる。
- 10 花岡一郎と花岡二郎。
- 11 邱建堂 Takun Walis の祖父は、邱安田 Takun Bagah (1915-85)。
- 12 部落の老人たちは北京語がわからなかった。
- 13 張国華 Iyung Pawan (1962-)。
- 14 Hcuo Pihau (1952-)。
- 15 パーラン社は1935年、霧社の濁水渓流域にダムを建設するため、川中島の東、中原へ強制移住させられた。タクン・ワリスの母ウマ・ノカン Uma Nokan (1932-2001) は、中原出身である。
- 16 蔡茂琳 パワン・ナウイ Pawan Nawi (1915-1994)。
- 17 1931年10月15日、川中島社の人々は帰順式の名目で埔里の能高郡役所に呼び出されたが、そのうち23人の男性が拘留され、やがて獄死した。なお、原文は「25日」となっているが、「15日」の誤植である。
- 18 1931年4月25日未明、収容所が襲撃され、収容されていたうち、216人が死亡した。
- 19 ワリス・バガハ Walis Bagah (1912-1931)。
- 20 霧社事件当時の能高郡郡守、小笠原敬太郎は、霧社で殺害された。

-
- 21 高愛徳 Awi Hepah (1916-1996)、アウイ・ヘッパハ。許介鱗編『証言霧社事件』(草風館、1985年)に証言が収録されている。
 - 22 筆者の曾祖父のバガハ・ポッコハ。
 - 23 日本側資料「霧社事件誌」によれば、ロードフ社のワリス・バガハは、昭和7年1月23日、留置中に病死。(『台湾霧社蜂起事件』社会評論社、1981年所収)

[著者略歴]

『清流部落生命史』6頁所収の Takun Walis (邱建堂) 著「Kari Berah Rwahan Patis (序)」には次のように略歴が記されている。なお、Takun Walis は、2005年以降、仁愛郷公所の民政課課長を務めている。

1952年清流部落に生まれる。台湾大学経済学科卒。霧社事件当時のロードフ Drodux 社頭目バガハ・ポッコハ Bagah Pukoh の曾孫。1974年、モーナ・ルーダオ Mona Rudo の遺体を、台湾大学人類学研究室から霧社に返還して埋葬した際は、台湾大学から霧社までモーナ・ルーダオの遺体につき添った。タックダヤ Tkdaya の祖先の伝承を守り、清流部落の歴史と文化の再建、発展に深い関心を寄せている。現在、仁愛郷農会総幹事である。